

御食事処 川鶺

～カワウが作り出すサギ類の採食機会～

申請者：熊田那央

はじめに

近年個体数を回復させたカワウ、放流した魚を食べてしまうことや、糞などで森林が枯れるなどの人間との軋轢で有名ですが、それだけに注目していて良いのでしょうか？

河川や海で魚を採食するカワウは水域生態系の上位捕食者です。カワウが個体数を減少させた後に回復したことは生態系にも大きな影響があると考えられます。



昔はたくさんカワウがいたのだから、その時代にもどるだけ、と単純には考えられません。なぜなら、個体数が減少し、回復した時期に、多くの河川では大規模な改修や、アユの大量放流によってその環境が大きく変わっているからです。例えば、河川構造が単純化し、魚の隠れ場所がなくなったり、浅瀬で採食する渉禽類の採食場所が減ったりしていることが考えられます。

このような変化した河川環境において、個体数を回復させたカワウが他の生物に与える影響を明らかにしたいと考えています。

今回注目したのは、カワウと一緒に採食するサギ類です。

サギ類は、河川でカワウと一緒に採食する様子がよく観察されます。申請者らが山梨県富士川水系でカワウとサギ類の分布を調べたところ、カワウが多い場所にはサギ類も多い傾向がみられました。サギ類はカワウが追いかけて逃げてきた魚をうまく利用しているようです。このようにカワウと集団採食を行う鳥類には、他にもコウノトリや、ヘラサギ類などの絶滅危惧種もいます。

このような鳥類は、カワウのそばで採食することで効率良く採食できるかもしれませんが、彼らはあまり深いところでは採食できないので、基本的には浅瀬に魚がいる状況がないといけません。カワウが採食することで、普段はあまり良い採食場所とならない所にも彼らの採食機会、「御食事処 川鵜」が生じると考えられます。

そこで、本研究では、

カワウによって作り出された採食機会「御食事処 川鵜」が、河川で採食するサギ類（ダイサギ、コサギ、アオサギを想定）にどのように利用されているのか を明らかにします。

方法

調査地 茨城県小貝川水系

調査方法

1. カワウとサギ類の分布

河川沿いを踏査し、カワウやサギ類がどこで採食しているかを記録します。特に「御食事処 川鵜」がどこで生じているのか、河川構造にも注目します。

2. サギ類の採食効率

河川で採食するサギ類を見つけた際に、5分間行動を観察します。

その間に食べた魚のサイズ、種類（可能なら）を記録し採食効率を求めます。

得られた結果から「御食事処 川鵜」が河川のどのような場所で生じやすいのか、サギ類が御食事処を利用する時としないときで採食効率がどのように違うのかなどを考察します。



山梨県南アルプス市で観察されたコウノトリ、サギ類とカワウの集団採食